

## 編集後記・編集部からのお知らせ



滝脇知也\*

早いもので前回の発行から3か月たった。3月の初旬の段階では進路が決まっていなかった人も行く先がきまり、それぞれの場で奮闘していることだろう。梅雨の時期で天気が悪いのは残念ではあるが、ここに *Acta Epsilonica* をお届けできることを嬉しく思う。

原稿に関しては今回も学術的に価値の高い記事が集まっている。知的好奇心を存分に刺激する内容で面白い。ただし、本雑誌の目指すところとしては、それだけでは物足りない。皆さんユーモアに富んだエッセイも募集中である。良いネタが思い浮かんだらぜひ投稿して欲しい。編集部でも原稿を準備中で、次の号ではお見せできるだろうと思われる。ご期待いただきたい。

前回の *Acta Epsilonica* の発行から今回の間に Group Epsilon では2016年の3rd meetingが行なわれた。続いて行われる4th meetingにてこの *Acta Epsilonica* は配られることになっている。これらのmeetingでは、運営面においても発表面においても若手の活躍が目覚ましかった。健全な世代交代は喜ばしい。

もう一つ喜ばしいのはこの *Acta Epsilonica* の主筆である山下弘一郎さんの病状が回復に向かい、力が入った記事を投稿してくれたことである。科学者としてはあまり運や奇跡という概念に頼りたくはないが、そういったものに感謝したい気持ちでいっぱいである。微力ではあるが、これからも応援を続けていきたい。

*Acta Epsilonica* の編集としては良いことばかりがあったわけではない。査読結果を返すの

が遅れたり、修正した原稿が添付されたメールを見逃して、査読者に送るのが大幅に遅れてしまったりした。Vol. 1, Nos. 1-2の発行がうまくいったため油断したのかもしれない。この場を借りて関係者にはお詫びしたい。再発防止のために投稿システムや連絡のシステムを改善するのが急務である。

雑誌の編集は創めることより続けることのほうが難しいのだろう。最初の気合と良い意味での緊張感は、慣れてくると容易に油断と慢心になってしまう。高い意識の継続が我々編集部の次の課題になるだろう。今回のように発行の日の間近に編集長に大きな負担がかかるのはなんとしても避けたいところである。

最後に体制の変更をお知らせしたい。本号から編集部には佐々木惟子さんが加わった。我々に足りないセンスを補ってくれると期待している。この新体制で準備している次回の *Acta Epsilonica* も引き続きご期待いただければ幸いである。

**主筆** 山下弘一郎

**編集長** 田中未来

**編集長補佐** 滝脇知也

**編集協力・美術監督** 久保田栄一

**編集委員** 佐々木惟子

\* 国立天文台, takiwaki.tomoya (at) nao.ac.jp.